

「和製英語」

ブルース・L・バートン

1999.5.31 放送

最近あまり新聞をゆっくりと読む暇はないのですが、先月末の朝刊を手にとってみたら、「日本語で説明して！外来語分からぬ、9割」という大きな見出しが目に入り、早速その記事を読みました。

その内容は、日本語における外来語の使用に関する文化庁の世論調査の結果をまとめたもので、要は、見出しの通り、ほとんどの日本人は、外来語をよく理解していないということでした。

その世論調査では、「スキーム」と「計画」、「アカウントビリティ」と「説明責任」、「コンセンサス」と「合意」など、カタカナで書く外来語と同じ意味の日本語でどちらが分かりやすいかということ聞いたのですが、ほとんどの場合、日本語の方が分かりやすいという結果が得られたそうです。

調査を行った文化庁には失礼な言い方かもしれませんが、これは当たり前の結果ではないでしょうか。自分の国の言葉より外国の言葉が分かりやすいという国民は、世界のどこを探してもいないと思います。

でもそれはそうとして、日本語には分かりにくい外来語がたくさんあることは確かです。さらに言うと、実は、外来語が、日本人だけではなく、我々外国人を困らせることも多いのです。

例えば、その発音。日本語の発音そのものも、私などあまりうまくできませんが、その中でも難しいのは、外来語です。なぜなら、元の言葉の発音が頭に入っていて混乱するからです。もちろん、日本語に50音しかないから、英語など音の数が多い言語から言葉を借りると、どうしても無理が生じるのですが、それでも理解に苦しむものがたくさんあります。例えば、日本語の「スタジオ」という言葉が英語の「ステュディオ」に由来しますが、発音はどうやってここまで変わってしまったのか、私には分かりません。

また、元の言葉が短いのに、日本語になると、長くなってしまうものもあります。昔、私が日本語を習い始めた頃、もっとも苦労したのは、「マクドナルド」という言葉でした。今となっては一応言えるようになったのですが、かなりの練習が必要でした。

他にも色々な問題があります。例えば、元が同じ言葉なのに、日本語に入ると二つの異なる言葉が出来てしまう例もあります。たとえば、労働組合などが行うストライキと野球でいうストライクは、日本語では違うのですが、もともと同じつづりと発音の言葉です。

しかし、こうした例は、ある意味では、まだいいのです。我々英語圏の人がより困るのは、和製英語、つまり、日本で作った偽英語の言葉です。もちろん、和製英語の中には、納得のいくものもあります。ゲームソフト、テレビゲーム、レンタルビデオ、ポケットベルの類いは、英語そのものではありませんが、それほど抵抗を感じないものです。英語の

感覚に近いからです。

あるいはサラリーマンとかオフィス・レディーという言葉も、違和感こそ少しありますが、意味ぐらひは十分に通じます。

ただ、こうした分かりやすい和製英語は、むしろ少ないのではないのでしょうか？CMや広告で見る間違いだらけのスローガン、歌で聞く意味不明の歌詞など、おかしな例があまりにも多いため、話しだせばきりがなくなってしまうのですが、私自身が最近困った和製英語としては、例えば、人間ドックと言う言葉があります。

これはよく病院の看板に見かける言葉で、私は見るたびにその意味について悩んでいました。明らかに病院と関係しているから、「ドック」とはきっと「ドクター」、つまり医者のことだろうと思いました。しかしそうすると、なぜ頭に「人間」をくっつける必要があるのか、説明が付きません。人間でない医者があるわけがありませんし、獣医ではないかぎり患者が人間でない医者もいません。結局分からないから、国語辞典で調べることにしました。そうしたら、「ドック」とは医者のことではなく、船のドックと同じ言葉で、「人間ドック」とは、船がドックに入るように人間が体の検査を受けるために短期間入院するという意味でした。言われてみればなるほどそうかとは思いますが、私にはどうしても思いつくことはできませんでした。

もう一つの例を挙げましょう。最近よく業務用の車のバンパーなどに「アイドリング・ストップ宣言」というシールが張ってありますが、この「アイドリング・ストップ」とは何のことでしょう？アイドリングという言葉自体が、エンジンを空転するとか、つけっぱなしにするという意味なので、アイドリング・ストップとはきっとエンジンを付けたまま停車するという意味だろうと私は思いました。しかし、考えてみれば、停車をするときにエンジンを消さないぞと胸を張って宣言する人はいないでしょうから、この解釈はおかしい。結局、アイドリング・ストップとは私が考えたのと正反対の意味で、アイドリングをやめましょうという意味だそうです。なぜ勘違いをしたかという、英語で「何々をやめよう」という場合には「ストップ」という言葉を最後ではなく最初に付けないと意味が通じないからです。

日本語で使われているカタカナ語の多くが、英語に由来するから、本来なら日本人と英語圏の人たちとのコミュニケーションを円滑にするはずののですが、こうした問題があるから、逆に障害になることが多いのです。

例えば、日本人が外国に行って、現地の人と自動車の話でもするとしましょう。バックミラー、ハンドル、フロントガラス、ウインカーなどはすべて和製英語でアメリカやイギリスではまったく通じません。クラクションは一応英語ではありますが、古い言葉で、これも理解してもらえないでしょう。まともに通じる単語は、結局、タイヤとワイパーぐらいなものではないのでしょうか？

もちろん、単語の問題だけではありません。単語そのものが正しくても、使い方が違ったり、発音が違ったりするからです。たとえば、車でファストフードを食べに行くとき

しょう。この場合の「ファスト」を「第一の」という意味で解釈している日本人が多いかと思いますが、実は、そうではなく、「早い」という意味のファストです。これでは、文字通り、話にはなりません。

では、どうしたらよいのでしょうか？実際問題としては、どうしようもありません。言葉は、上から規制できるようなものではなく、人々の生活の中から生まれてくる、生きたものだからです。そうすると、日本語にこれだけ外来語があるのは、結局、日本の人たちがそのような言葉を使いたいからということになります。それはなぜでしょうか？単なる外国へのあこがれなのか？それとも多少とも劣等感が混じっているのか？あるいは、そうではなく、いわゆる国際化で日本人がそれだけ外国語に強くなってきたという証拠でしょうか？

答えは一つではなく、恐らくこれらのすべての要素が入っているだろうと思いますが、いずれにしても、日本語における外来語の問題を考える場合、「分かりにくい」とか「多すぎる」といった表面的なことにとどまらず、外国の言葉をそこまで使いたがる人々の心理まで探る必要があるように思います。

日本という国がこれからどのように変わっていくか分かりませんが、日本の歩みに伴って、外来語のありかたも変わっていくに違いありません。外来語がこれからも増え続けるのか。今言った広い観点からその変化ぶりを見ておきたいものです。

では。